

埼玉医科大学グループ男子駅伝部



夢

ニューイヤー駅伝出場! の舞台への挑戦

ニューイヤー駅伝とは、新年最初の日本一を目指す戦いであり、60年以上の歴史を誇る駅伝最高峰の舞台である。正月の風物詩として、箱根駅伝と並び、毎年、観戦を楽しみにしている人たちが多くいるとだろ。そのニューイヤー駅伝に、町内の医療機関である埼玉医科大学グループの男子駅伝部が、創部4年目で出場権を獲得するという快挙を成し遂げた。

そこで、ニューイヤー駅伝出場の立役者である男子駅伝部の柴田純一監督(39歳)に埼玉医科大学グループ男子駅伝部(以下、埼玉医大駅伝部)のこれまでの軌跡を伺った。

監督就任時、部員二人からのスタート

柴田さんが創部1年目の埼玉医大駅伝部の監督に就任した際、二人の選手しかおらず、当然、練習は個人練習のみで、監督も選手と一緒に練習して練習をしていたという。

2年目には、やっと大会に出られるだけの部員数になったものの、ニューイヤー駅伝出場には程遠く、予選会である東日本実業団駅伝大会(以下、東日本駅伝)ではタスキを繋げられず繰り上げスタートになるという結果だった。

それもそのはず東日本駅伝は、ニューイヤー駅伝の予選会とは言え、富士通やホンダ、



柴田 純一 監督
しばた じゅんいち

大東文化大学在学中、選手として箱根駅伝に3回出場。大学卒業後、実業団駅伝の名門チームであるホンダに所属していたが、指導者を志し退社。教員免許取得の傍ら、コーチとして大東文化大学駅伝部を指導し、4年間でチームを箱根駅伝シード権を獲得させるまでに導く。その後、東京農業大学第三高等学校の教員として、高校生に陸上を指導。2016年から埼玉医科大学グループ男子駅伝部監督として就任。



夢から現実的な目標へ

ニューイヤーマン出場が夢から現実的な目標へと変わったのが、令和元年1月に飯能市で開催された奥むさし駅伝大会での優勝である。そこで監督自らが最終走者を務め、劇的な逆転で優勝したことで、チームの意識、周囲の認識が変わってきたという。そして同年11月、2度目の挑戦となる東日本駅伝でニューイヤーマン出場ラインまであと1分に迫る大健闘を果たす。

惜しくも出場を逃したことで嗚咽する選手たちのなか、監督にはこの先、何をどう変えていくことでニューイヤーマン場に届くという着実な道筋が見えていたという。

新型コロナウイルスによる練習活動の中止

ニューイヤーマン出場が明確な目標へと変わり、選手たちの意識も変わるなか、新型コロナウイルス感染症により状況が一変する。

選手たちは皆、日中は病院内の受付などで勤務を行っている。緊急事態宣言下で周囲の医療従事者が新型コロナウイルス感染症患者の受け入れで奮闘するなか、駅伝部も2か月間の活動停止となり、満足いく練習ができない状況が続いた。

それでも、選手たちは人となるべく出会わない早朝の間際に鎌北湖や滝ノ入で個別に走り、練習したという。「都会であれば人と会うことなく練習することは難しかったかもしれないが、コロナ禍でも毛呂山の自然豊かな環境のなかで、アップダウンのあるコ

ースをトレイニングできたことはよかったと思う」と語る。

箱根駅伝への悔しさをバネに

今年度に入り、新たな部員も加入することで戦力が上がり、ニューイヤーマン出場が現実のものとなってくる。東日本駅伝で大活躍を見せたケニア国籍のワンブア タイタス選手も今年度から加入した選手だ。ワンブア選手は箱根駅伝出場を夢見て、ケニアから来日し武蔵野学院大学に入学したものの箱根出場は叶わなかった。大学卒業後の進路を検討する際、奥むさし駅伝が縁で埼玉医大駅伝部に所属することになったという。

「うちが伸びてる要因って、選手たちが箱根に出られなかった悔しさからも来てるんです。ニューイヤーマン駅伝は箱根駅伝のスター選手が毎年入ってくるような実業団が集まる大会なんです。だから僕は選手たちに『箱根を走ったことがないのにニューイヤーマンに出るってめちゃくちゃカッコよくない?』って、ずっと言ってきたんです (笑)」。

今年度、東日本駅伝に出場するにあたり監督は一つの決断をする。それまで選手兼監督としてレースに出場していたが、監督に専念することにしたので。

「ニューイヤーマン駅伝まで、あと一歩のところまでは来たが、もう一つ上のステージに行くためには、もっと全体を見てあげないとダメだなと。監督自らが走っているようにじゃダメだ」と。監督としてレース全体を通して見たのは今回の東日本駅伝が初めてだという。しかし「本当は、僕もニューイヤーマン駅伝を走りたいんです (笑)」と本音をのぞかせた。

柴田監督は、大学時代に選手として箱根駅伝に3度出場しているが、実業団駅伝では、名門ホンダに所属したもののニューイヤーマン駅伝を走ることができなかった。

今回、監督はニューイヤーマン駅伝を選手として走るという夢を断念する決断をしたが、その代わりに箱根駅伝を走れなくても夢を諦めず、努力し続けた選手たちの夢を指導者として叶えたのだ。

みんなの思いを

タスキに込めて

「駅伝って選手個人がひたむきに練習してきたという思いだけではなく、応援してくれている人の思いや色々な思いを一本のタスキに込めて、リレーしていくところが駅伝の楽しさなんです」と監督はいう。

「初出場なので守るものも何も無い。みんなで勝ち取ったニューイヤーマン駅伝なので思い切って挑むだけ。もちろん自分たちのレースにかける思いもあるし、町民の皆さんの思い、埼玉医大職員の思い、全国の医療従事者の思いを込めてゴールまでタスキをつなげきり、自分たちのタスキで『ゴールしたい』とニューイヤーマン出場への意気込みを熱く語ってくれた。

明るい新年の始まりに夢の舞台に挑む埼玉医科大学グループ男子駅伝部。その思いを込めた走りは、毛呂山町だけでなく全国の医療従事者や夢に向かって努力しているアスリートに元氣と希望を届けてくれることだろう。